

Michael Löwy, *THE WAR OF GODS: Religion and Politics in Latin America*

London, New York: Verso, 1996, 163pp.

沖 塩 尚 孝

ラテンアメリカの政治状況は革命やら軍政やらゲリラやテロでやたらと新聞をにぎわしているように、激動の渦中であつたし、現在もそうである。本書はラテンアメリカのここ30年くらいを中心に、解放の神学をその主なものとしつつ、宗教（カトリック教会・プロテスタント・ペンテコスタなどのキリスト教諸教）とラテンアメリカの政治、文化運動が密接に関わる広大なアリーナをカトリック教会中心に描き出そうとしている。

解放の神学や、実践として行なわれた、または行なわれているカトリック信徒や聖職者の解放運動や労働運動、革命運動という新たなラテンアメリカのダイナミクスが問題対象とされ、同時に宗教と政治などについての理論的考察も試みられている。解放の神学の紹介の本や批判の本、まとめた本はたくさんでているし、解放の神学の捉え方も細かい相違はあるが、そう違うものではない。この本ではむしろ宗教、もしくはカトリックと政治についての理論的言及が目新しい。

解放の神学は、たくさん本が出版される我々第一世界において、同情的な雰囲気のあるなしにしろ大方整理された本が多くでているが、理論研究や普遍化のレベルにおいて、概説的ではあるが本書は一步先んでいる。

本書の題名 'THE WAR OF GODS' は Max Weber からの引用であることは明らかであるし、著者もそう述べている。著者によれば、ウェーバーはこの概念を、近代における価値の多神論や究極的信念（神）の架橋不可能な対立として用いている。そしてこの語を、ラテンアメリカのここ35年来の状況を評するにふさわしい表現であるという。抑圧者、被抑圧者もみなひっくるめてキリスト教（またはカトリック）であるラテンアメリカにおいて、教会の内部的には保守的階層と進歩的集団の対立、外部的には解放の神学のように表現されるもの、解放する神と抑圧者の偶像である市場、資本、富、商品との対立。これらの対立が「神々の闘い」であると表現されている。商品・資本が偶像であるというところは、マルクス主義を想起させるが（実際マルクス主義的概念を用いている）、またそれが解放の神学で取り沙汰される大きな議論の一つである。そしてそれはこの本のなかでも扱われる。

著者はユダヤ系ブラジル人であり、政治的、学問的にマルクス主義の伝統に拠っていると述べている。また、ラテンアメリカ人として、「解放」を目指すキリスト教諸運動に共感をおぼえるものであるといいつつ、非キリスト教徒としてこれら宗教・文化・政治運動に距離を感じると述べ

てもいる。貧民大衆の自己解放のためのキリスト教徒の闘争に倫理的・政治的共感をおぼえることを否定するつもりはない、つまり共感する、と述べるのが著者の立場である。けれどもそのうえで著者はこの価値観・選択を共有しない読者にも読んで益あることを願う、としている。

著者は文化社会学の方法を用いていると述べている。そしてマルクス主義的な伝統にかなり触発されているものであるといいながら、同時にウェーバーの概念の重要なものをいくつか用いていると述べている。

本書の構成を述べよう。

#### introduction

### 1 Religion and Politics: Revisiting Marx and Weber

- ・ Marxism and Religion: Opium of the People?
- ・ Catholic Ethics and the Spirit of Capitalism: The Unwritten Chapter in Max Weber's Sociology of Religion

### 2 Liberationalist Christianity in Latin America

- ・ Liberation Theology and Liberation Christianity
- ・ Modernity and the Critique of Modernity in Liberation Theology
- ・ Liberation Theology and Marxism

### 3 Politics and Religion in Latin America: Three Examples

- ・ The Brazilian Church and Politics
- ・ Christianity and the Origins of Insurgency in Central America
- ・ Liberationist and Conservative Protestantism

### Conclusion: Is Liberation Theology Finished?

このなかの理論的考察のところを中心に述べよう。

一章では宗教と政治の相関についてマルクスとウェーバーからそれぞれものいいをする。まず **Marxism and Religion: Opium of the People** という節が来る。

この節では、マルクス主義と宗教についての言説の歴史的経緯をおっている。マルクスの有名な言葉「宗教は阿片である」はマルクス主義者の社会分析の一つである。一方で宗教家のほうは反対に、この言葉をドグマティックに受け取ってマルクス主義を否定する傾向がある。本書では勿論そのような不毛なドグマティックな対立を肯定して終わらない。宗教とは、マルクス・エンゲルスがいうように反啓蒙主義、保守反動の牙城であるのか？大衆の明晰な思考や行動を妨げる麻薬のようなものであるのか？著者の結論はこうである。その意見に一面賛成である。そしてそれは事実だと認める。近年のファンダメンタリズムを例示したりする。

しかし阿片ではない局面が発生する。これが解放の神学または **Revolutionary Christianity** にあたるものと考えられている。カトリック信徒が革命の担い手として教会や聖職者に対立するのであればこれまでの伝統的な階級闘争の図式を導入して説明が可能であるが、祭司や修道会士が解放闘争や革命運動にコミットしていくことがラテンアメリカで起こったのである。これはどう説明したらよいのか。解放の神学はマルクス主義の諸概念を用い、貧民大衆の社会的解放のための闘争を鼓舞する宗教的言説なのである。これが本書の全体をとおしての主題である。

それでは実際にマルクス主義と宗教（カトリック）の関連について歴史的にどういわれてきた

のか。まず著者は、宗教が阿片、麻薬であるというメタファーは何もマルクス・エンゲルスによって初めていわれたわけではない、ということ強調し、例を挙げる。そしてまた宗教は真に人間をつき動かすものとして、社会運動の主体として強力な活動性を持つことがこの節の結論的にいわれる。著者によれば、エンゲルスはトマス・ミュンツァーらのドイツ農民戦争などに宗教が革命を担う例などを研究し、階級闘争の視点からこれを説明しているが、彼はフランス革命以降近代においては宗教が革命を担うことはないだろうと結論していた。エンゲルスは、無論そのような限界があったにせよ宗教が独自の文脈で階級闘争を担うことがある、というケースを認めていた。彼は宗教の、体制に反抗的な潜在性を指摘したので、新たな宗教へのアプローチの可能性を残した、と評価される。マルクス、エンゲルスと同時代に社会主義の言論活動をしていて、互いに交わりもあった Weitling などは「キリスト教は共産主義である」とさえ主張していたという。(この意見の相違がマルクス、エンゲルスとの袂を別つ直接の原因でもあるけれども。)

以下様々な思想家が紹介されているが、全員をここにあげるのは無理だと思われるため、特に大きな扱いをされている思想家を挙げると、Gramsci と Ernst Bloch、そして Bloch の問題意識を受け継ぐ Lucien Goldmann である。ここでは紙面の容量上割愛するが、極めて重要な議論がなされている。

それぞれの思想家の議論は、どれを取っても豊かな議論が望められると思われる。例えば上記の Gramsci は本書のように簡単にまとめきれものではない。もっと議論は複雑である。また私としても紹介程度で理解できるものではない。ここでは様々な思想家が著者の広大な知識をもとにざっと書かれているので説明を読んでもいささか私としては消化不良気味である。ただ押さえておきたい重要なものはユートピア的な宗教的諸概念、そしてそれらがマルクス主義との接近を可能にするファクターであり、人間をつき動かすという議論である。かような言説を詳しく理論研究することも、宗教とマルクス主義の関連に関して大変益あることである。そのための理論の概説的な、通史的な議論としてこの本は有益であろう。

同じ章の次の節は、Catholic Ethics and the Spirit of Capitalism: The Unwritten Chapter in Max Weber's Sociology of Religion という題名である。ウェーバーの著作で、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は代表的というほど知られている。著者はウェーバーのこの本や他の著作から、「カトリックの倫理と資本主義の精神」を読み取ろうとしている。これまた詳しくみることはしかなるので、簡単にまとめる。著者はウェーバーの 'elective affinity' (独語、Wahlverwandtschaft) という概念をもってくる。無理に和訳すれば「選択的類似性」とでもなるのだろうか。著者 (Löwy) によれば、ウェーバーはこの概念を定義づけせずに用いている。しかしその文脈から演繹的に定義すれば、ときには文化的共生にまでいたる、相互親和、相互強化の関係である、といわれる。この概念がプロテスタントと資本主義の関係に適用される。それではカトリックと資本主義の関係にはなんという概念が適用されるのか。そこででてくるのは negative affinity という概念である。カトリックは資本主義に対し affinity が欠けているということがウェーバーのテキストからいわれる。そしてそれにつわるその他の論者の中様々な議論をたくさん挙げている。結論として、カトリック教会は anti-capitalism の ethos があると述べられている。これは教会が保守反動的であり、封建時代の過去の栄光を再び、という教会のノスタルジアであるという議論を挙げる。教会のユダヤ人迫害などを例に挙げ、確かにそれらはカトリッ

ク教会に基本的・支配的な方向性であると認める。しかし一方、貧者の窮乏に同情するという強力で主要な動機が同時にあり、そしてこれは少なからず社会主義者、共産主義者のユートピアに感化されている、という。そしてこの2つの面は常に相対立するとは限らないものであり、進歩的ユートピアと、反動的復権という正反対の二つの極の間には曖昧で、両義的なあらゆるスペクトルがある、といわれる。相反する要素があり、その間であらゆる曖昧で両義的なものがある、といわれても、少なくとも学問的に説明になっているとは思われない。(現実としてはそのようなものかもしれないが。)

二章で著者は教会のなかの立場の分類を試みているが、大きく四つに分けている。まず極めて反動的なファンダメンタリストの小集団が教会内部にあることを述べている。そのような教会絶対主義のような semi-fascist。次にローマ教皇庁やラテンアメリカの聖職者のなかでも支配的な上級者に多い、保守的な層で、解放の神学には反対の立場。三番目には穏健な改革派がある。人権を守ることを優先し、知識人のような人が多い。四番目は小さいが影響力の甚大なラディカル派。(過激派というと日本ではテロリストと同一なのでここではそのような訳は避ける。暴力を実際に行なうのではなくその言論・主張が他に比べ過激なのである。) 上記の神学に共感し、大衆運動や農民運動、労働運動に活発な連帯をなす。サンサルバドル大司教 Oscar Romero が代表的。そのなかで最も過激なのは解放闘争、革命戦争に参加する者たちである。Camilo Torres Restrepo 神父が代表的。彼はゲリラ闘争に参加し、戦死(または殉教)した(1960年代没)。教会の聖職者のなか自体に、かように様々な態度が存在しているのである。

ラテンアメリカの全人口の約90%がカトリック信徒であるという文化的背景、大衆とは他ならぬ貧民を指すという経済的条件などの歴史的條件を考慮に入れないと、やはり理論研究だけでは、ここ数十年来ラテンアメリカで起きている状況の説明には無理が生じる、ということは無論である。資本主義体制、社会が事実上確立、拡大していくなかで、教会がなし崩し的に体制(資本主義・ブルジョワ社会)に妥協していくと同時に、バチカンの1891年の *Rerum Novarum* 以降、主に教皇の回勅などの社会教説の形で表わされるような、少なからず社会主義的な匂いのする教会の社会正義の追求の方向、その他カトリック左翼が同時に生まれてきた。そのような歴史的背景を考慮に入れることが適切だろう。クリア・カットな結論や理論はかなり難しいと思われるが、このような背景でもって全体像がつかみやすくなる。

解放の神学を考察し、まとめ、分析するこの章に、他の本にはない特に優れている点がある。それを次に述べよう。

「解放の神学」とは実際どこからどこまでなのか。それは世界中に広まっている。ここではラテンアメリカに限るとしても、それでもまだ曖昧である。ここからが著者の殊に優れているところであるが、通常、解放の神学は社会的、宗教的運動という広い意味で参照される。しかしそれは不適切であるという。そのような運動自体は、新たな神学、その神学者が現れるもっと何年も前に既にあった。これを 'Church of the Poor' と呼ぶことがあるが、そうすると今度は体制としての教会に限られてしまうので、全てひっくり返して liberationist Christianity という新たな表現が与えられる。こうなると解放の神学は Gustavo Gutiérrez 神父の *Teología de liberación* 以降の、神学者の手より成るテキストに限られることになる。私自身もときとしてこれらを混同して考えていたし、他の本でも解放の神学の意味がこの枠組みに比して少々混同しているものもある。

著者は解放の神学の考察をいくつかに分類しているのでそれを挙げてみよう。

まず解放の神学について、著者はその主張の内容を大きく八つに分類する。解放の神学はそれぞれの神学者によって扱う内容に差異がある。例えばある解放の神学者は「解放」の意味について深く扱うものがいれば、他の神学者はいままでの神学が社会体制（資本主義、右派）に従属的であったことを告発するような論調であったり、また教会論を中心的に扱ったりというものである。箇条書きで羅列され示されている。それぞれの項目に私の（著者には比ぶべくもない狭い知識であるが）コメントを加えつつ述べてみたい。

1. 新たな偶像崇拝を宗教の敵として闘わんとする主張。何が偶像かといえば、富、市場、国家保安、国家、軍隊それらを総称して「西洋キリスト教文明」というところまでいく。富や市場が偶像というのは資本主義批判、マルクス主義との接近があるところでもある。国家保安は独裁者や軍政権が左翼や民衆の運動を弾圧するための「正義」の源泉である、ということである。2. キリストの最後の救済、神の王国への期待としての人間の歴史的解放。3. これまでの神学を、プラトン以来のギリシア哲学の所産である、二元論的なものであるとして批難する。本来的な神学とは人間と神の歴史が互いに別個のものでありながらも不可分である、という。しかし不可分といってもその具体的内容における一致は私もよく分からない。4. 聖書を新たな文脈で読むこと。隷属下にある民衆の解放を求める視点で読もうとする。『出エジプト記』は貧民大衆が自ら解放を目指すものとしてよく挙げられる。5. dependent capitalism を、不正な構造悪であるとして、道徳的、社会的非難を行なう。dependent capitalism とは、ラテンアメリカのマルクス主義がこの地に特有の不正な資本主義である、としている。乱暴に述べれば、アメリカなどを中心とする先進諸国の資本を入れ、返せない借金が累積している貧しい国々がラテンアメリカであり、それらと結ぶ支配層は億万長者となり、大衆は貧しいまま世界の資本主義体制のなかで搾取される立場となる、という理論である。6. マルクス主義を社会分析の方法として使うこと。貧困の原因、資本主義の矛盾、階級闘争の形態などについて語る際に用いられる。何といっても解放の神学はこの点が大きく取り沙汰される場所である。7. 貧民大衆への優先的選択。彼らと連帯して彼ら自身の解放の動きと連帯すること。8. Christian base communities について語ること。解放の神学はキリスト教共同体という草の根の母体から生まれた、とよくいわれる。この組織では祭司や修道会士らの司牧活動と基礎教育による民衆自身の意識向上がみられた。そして民衆が自ら組織を運営するようになり、政治意識の向上、新たな聖書の読み、具体的運動へのラディカル化が起こってくる。

三章で、具体例としてブラジル、ニカラグア、エルサルバドルの状況が通史的に簡潔に書かれている。この3国は liberationist Christianity がおおいに発展をみせた国である。ブラジルでは労働運動とそれを支持するカトリック教会、ニカラグアでは例のサンディニスタ革命が起こった。エル・サルバドルは血生臭い内戦とイエズス会士六人の虐殺やオスカー・ロメロ神父の暗殺などは世界的に有名である。

本書を通しての結論の部分では解放の神学は既に過去のものなのか、という議論が進められている。確かに一時の盛り上がりには比べ、あまり耳にしなくなった解放の神学であるが、それはここ10年のなかでの東西対立の解消、社会主義・共産主義諸国の体制の破綻がある。著者は解放の神学がこれからどうなるかというような予言的なことはできないと述べている。

解放の神学は新たな局面を迎えつつあることは確かである。最近エコロジーや民衆宗教、フェミニズムなどの議論も解放の神学の議論に含まれつつある。また、近年ペンテコスタの信者がラテンアメリカ各国で激増しているし、先進国のような情報化の波はラテンアメリカを覆いつつあり、ポストモダンの雰囲気が増している。状況は変わりつつある。

著者は最後に、解放の神学は既にラテンアメリカの地に多くの種子を蒔き、発言の機会さえ与えられない人たちへの場を提供した、と述べる。この種子が来たる未来に花を咲かせるだろう、と抽象的に述べて本書を閉じている。解放の神学は以前程の熱気は失せたにしろ未だ著作は数多く著わされている。これから新たな局面を迎え、様々に変質していくのであればこれからの動向に注目してみることを勧める。

本書は著者の広範な知識に基づいたテキストである。マルクス主義のいままでの流れのなかでいわれてきた宗教、ウェーバーからのカトリック考察など、目新しい点からの考察が斬新である。そして解放の神学の概説的まとめだけでなく実際の各国の歴史をみている。解放の神学をめぐるプロテスタントや右、左の政治状況も書いてあり、概説的ではあるが、ラテンアメリカの政治と宗教をめぐるアリーナを把握するに益あるだろう。あえて難点をいえば、ブラジル以下の三国以外で、なぜ解放の神学とそれにまつわる運動がそれほど高まりをみせなかったのかも考察してほしかった。